

伯井誠司

ソネット

かの女はかつてわが母の友なりしかば、ある二月、
われらは母の眠りたる墓を参りに行きしかど
駅を出たれば一面の雪…… その町はことごとく
雪に埋もれて色もなく、たゞ空のみが深き青。

バスの停留所も雪につぶされたりき。仕方なく
花屋のひとに道すぢを訊ねてわれら深雪を
踏み分けたれど、墓地のある丘さへ雪は閉ざしたる……
管理の人は言ひたりき、「上に参るはむつかし」と。

母のやさしき友なりしかの女もつひにあきらめて
そこに残りき。さりけれど、花を捨つるも惜しきゆゑ
たうたうわれはひとりきり丘を登れり、雪の中……

やうやく墓に辿り着き、花を手向けて倒るれば
人影も無き静けさに冬の光が降り注ぎ、
あたりにはたゞ雪のみがきらきらとしてみまぶしかりけり。